

ここ数年で音楽・本・マンガのネット上でのダウンロードは、私たちにとってより身近なものになっている。特にスマートフォンの急速な普及に伴って、電子書籍は注目の的となった。近年アメリカでは電子書籍の売り上げが上がるとともに若者の読書率が高まっているというが、日本の若者の間にそのような顕著な傾向はいまだ見ることができない。

調査会社インプレスR&Dによると、2012年度の電子書籍作品の国内配信市場は、前年度比 2.6 倍の 294 億円に成長する見通しだ。しかしながら私達学生の間ではその成長に対してさほど普及していない。今回 MitaCampus が大学生 200 人を対象に電子書籍に関するアンケートを実施したところ、電子書籍を利用したことがあるのは 23%だった。週に一回以上使っている学生は全体の 7%であった。紙の方が結局は便利だと感じるという意見が目立った。なによりもコンテンツの貸し借りができない割に高価であるという点が難点だそうだ。

ただ、電子書籍は市場が拡大しているだけの魅力も持っている。電子書籍といえば、多くの書物をタブレットなどの携帯端末一つで持ち歩けるものである。多くのものは書籍内をキーワード検索できたり、単語の意味もすぐに調べられたりと非常に多機能だ。

「来たるべき時代に備え、図書館は紙の本のみならず電子書籍も持ち合わせている必要がある」。慶應義塾大学日吉メディアセンターテクニカルサービスの担当者は言う。2010年 12 月から慶應義塾大学は、「電子学術書利用実験プロジェクト」に実験現場として関わっている。このプロジェクトは学術専門書を電子化し、教員や学生への提供を試みるものだ。学内の学生モニター52人に、独自のアプリを入れた iPad を半年間使ってもらい、使用後の彼らの意見をアプリ改善に活かしている。この電子書籍アプリ Book Looper3 は学術出版社、大日本印刷、京セラコミュニケーションシステムが共同して完成させた。このアプリは一つの書籍につき 20 人までが同時に無料ダウンロードでき、2 週間たつとそのコンテンツが自動で消える仕組みになっている。書店で本を買うというよりは図書館で借りる感覚に近い。一般的な電子書籍にみられる付箋・ハイライト機能に加え、手書きも可能なメモ機能を備え付けた。どこにいても入手することができ、書き込みも可能である点では図書館で借りるより便利だと言えるだろう。しかし著作権手続きにコストがかかり、書籍の数がなかなか集まらないのが現状だ。また、今後どのように永続的ビジネスとして成り立たせるかも課題である。

2012年 4 月、同プロジェクトは他の大学でもモニター実験を開始した。このプロジェクトの成功は、大学生の間での電子書籍の普及につながるだろう。